

『戸籍簿』(1) (原題『戸口本』)

著者：史 傑鵬

訳者：閻 小妹・上條 和恵

キーワード：中国の戸籍制度 中国の農村 差別 貧困 都市・農村の格差

【『戸籍簿』の翻訳にあたって】

一 著者について

著者史傑鵬氏は1971年中国江西省の農村に生まれ、1994年江西師範大学を卒業後、北京大学大学院で古典文献学を専攻し1997年修士号を取得。同年北京師範大学古籍・伝統文化研究院の教員になった。また北京師範大学大学院で漢語言文字学を専攻、2004年博士号を取得している。研究の傍ら、長編小説『亭長小武』をはじめ、『嬰齊伝』『賭博人陳湯』『赤壁』『秦観』『文景之治』『楚漢の覇権』『楚の墓』『悠悠我が心』などの歴史小説や随筆を相次いで出版、中国では珍しい学者型の人気作家である。しかし、2017年7月に社会に対する様々な批判的な発言を大きく取り上げられ、大学准教授の職位を剥奪されることになった。文化大革命以降、言論によって大学教員が解雇されたこの事件は多くの知識人に衝撃を与えた。その後史氏は東京大学東洋文化研究所に客員研究員として来日、現在も精力的に創作活動を続けている。

二 長編小説『戸籍簿』について

『戸籍簿』は作者である史傑鵬氏の自伝的作品とも言われている。中国では農村生まれの人間は農村戸籍、都市生まれの人間は都市戸籍になるという、生まれにより決定され移動不可能な戸籍制度(1958年1月実施)が存在する。それによって、農民の都市への移住は厳しく制限され、中国人は「農村人」と「都市人」とに二分化されてきた。戸籍制度は改革開放後の1990年代から徐々に緩和されてきているが、現在でも継続している。そして長年農村戸籍の人々への差別は、入学・就職・結婚など人生の様々な段階で影響を及ぼしている。幼少時代からこの差別を敏感に感じ取っていた史氏が、実際に体験したその日常生活をリアルに描いたのがこの小説である。およそ20万字の長編であるが、テーマ別で55章に分けているので、短編としても読める。各章題は次の通りである。

①見合い ②結婚 ③家族史 ④犬 ⑤分家 ⑥城南旧事 ⑦小菊 ⑧魚の骨 ⑨鶏を描く ⑩宝蓮燈 ⑪上海娘 ⑫写真 ⑬金を拾う ⑭金順小学校 ⑮豚の市場 ⑯復讐 ⑰カヤ ⑱水泳 ⑲二人のおじさん ⑳姜さんの娘 ㉑曇りの日 ㉒小銭二角 ㉓雨の日 ㉔田舎者 ㉕蒼先生 ㉖国慶節 ㉗引

越し ⑳テレビ ㉑食事をねだる ㉒田舎弁 ㉓人を殴る ㉔水を運ぶ ㉕米を買う ㉖工場のバス ㉗発育 ㉘家の裏の池 ㉙紅楼夢 ㉚金瓶梅 ㉛病にかかった ㉜大晦日の午後 ㉝絵を描く ㉞春の遠足 ㉟李婆さん ㊱春の一日 ㊲二人の阿呆 ㊳淡い月光の下 ㊴スープを飲む ㊵映画を見る ㊶詩を読む日々 ㊷入学合格書 ㊸戸籍 ㊹父の旅行 ㊺夏休み ㊻古籍書店 ㊼無題

三 翻訳にあたって

三年前から信大人文学部の学生と共にこの小説の読解作業を進めてきた。現代中国事情の理解に役立つのはもちろん、生きた中国語会話を習得させるためにも大変読みやすいテキストであった。ただ、会話の中に著者である史氏の出身地南昌地方の方言や、また農村で普段使われている俗語、更には赤裸々な罵倒語が多いため、受講生だけではなく教員の筆者にとっても詳細な理解が難しく、しばしば困惑させられた。幸いなことに史氏は現在東京在中で、我々の質問にいつも快く答えてくれた。三年間で小説の半分を読み終えて、これから少しずつ和訳を掲載する予定である。この小説『戸籍簿』を通して、多くの日本人に20世紀後半の中国農村の日常を少しでも知ってもらえればと願っている。

戸籍簿

第1章 見合い

1970年代初め、25歳の父は慌てて結婚相手を探していた。父は自分にはもう時間があまりないということが分かっていた。田舎では皆、結婚適齢期の年齢になるとすぐ結婚した。この村で結婚のチャンスを逃がすとほかの場所でも望みはなかった。しかもそれ以外に父は生理的にも結婚相手が必要だった。

幸い、多くの仲人婆さんがいたので父はすぐ見合いをした。ある人が3キロ離れた三店生産大隊に住んでいる女性を紹介した。父は午前には喜び勇んで出かけ、午後は意気消沈して伯父のオンボロ自転車を押して帰ってきた。父は鳴き出迎えるニワトリの群れをかき分け、ニワトリの糞だらけの地面を踏み締めながら中庭を通り抜け、自転車を止めズボンの埃を払った。祖母はちょうどかまどの前に座り米を炊いていた。火箸で細いわら束を一束ずつ挟みかまどの中へ詰め込んでいる。炎の光がしわだらけの祖母の横顔を明るく照らし、真赤な温かみのある色合いで、まるで古典絵画の一部分のようだ。父を見て祖母はすぐ立ち上がり、「どうだった？」と急いで聞いた。

中庭の向こうで、太っていて背が高く、頑丈な体をした上の伯母が大きなお腹を突き出し、手に雑巾を握っていた。下の伯母は生まれて間もない女の子を抱きながらちょうど母乳を与えていた。片方の乳房が外に垂れ下がっていた。伯母たちは仕事を止め、期待した様子で父を見つめ、見合いの事を問う視線を

向けた。

父は首振り扇風機のように頭を横に振って言った。「みんな、『満開の花咲く村』を見たことがあるだろう？」

「数日前、運動場でまだ上映していたから、見たことがない人はいないだろうね」と上の伯母が言った。

父は、「あの女は映画のように600労働点数1を稼ぐんだ」と言った。

この労働点数の話は朝鮮映画『満開の花咲く村』から来ている。映画の中の女主人公はたくましい身体で、男性と同様に600労働点数を稼ぎ、社会主義新農村建設の模範となる手本だった。

上の伯母は「600労働点数、なんてすごいの。食べるにしても仕事をするにしても、嫁にもらえば全ての事に心配事がなくなるねえ」と言った。

下の伯母は「すごく不細工で太りすぎだよ」と違うことを言った。

父は「そのとおり、本当に見るに堪えない」と言った。

祖母は少しがっかりした。「もういい、もういい、もう少し待とう、お前はこんなに立派に成長したし、教養もあるから、嫁を見つけられないはずがない。」

数日後、上の伯母の親戚がやってきた。入り口の敷居を跨ぐと、ネズミのようにあちこち見回し大声で言った。「金妹、あんたいい暮らしをしているね。貴旺は真面目でいい子なだけでなく国営工場で正式の仕事もある。町の戸籍もあるし、何でもあんたの言うことをよく聞く。あんたはまったく運がいい。すでに勝ち組だよ。」そして従兄の頭をなでた。「林ちゃん、新しい家はいいだろう？ 覚えておきなさい、ここが自分の家になったことをね。前の父さんのことは頭の遠くに追いやって忘れちまいなさい。」

上の伯母が彼女の話さをえぎり言った。「そう、そう、おばさんは本当にやり手だよ。家の事も助けてくださいな。」

「そんなこと言わないで、親戚の間でそんなに気を遣うことはないよ。」

「我が家の三男坊、今年25歳になるが、おばさんも知っているでしょう。彼に女の子を紹介してくれない？」

「金竜のことか、まだ嫁を世話してなかったかい？私に任せなさい。わたしのほうにちょうどいい人がいる。うちの旦那を知っているだろう。生産隊が町の金塔街の肥しを運ばせるために旦那を金順生産隊へ派遣して、そこで部屋を借りたの。あそこの家には酉年生まれでまだ嫁に行っていない女性がいるの。金竜より一歳年下で、仕事ができるし、女性民兵小隊長もやったことがある。今は村で裸足の医者²をやっている。雷鋒³を学ぼうとする向上心のある人だよ。農村戸籍だけど、生まれたところはとても良い場所で、その金塔街では穀物ではなく野菜だけを育てている。家の前には広いアスファルトの道があり、自動車も人びとも多く行き来している。ここの城南村とは違う。城南はいたるところ石炭がらを敷いた道だらけで、自転車に乗るだけで、宵越しの糞が上下の振動で揺れて出てきてしまいそうだ。夜になると道には人の気配さえなく、悪霊が人を殴り殺して……。あんた、興味があるかどうか三男坊に聞いてごらん、もしその気があるなら、二人が会えるよう私に取り計らってあげるから。」

伯母が言った。「なんていい条件なの。向こうは私たち田舎者を気に入るかしら？」

「あの家の娘はいいこと尽くめだ、ただ数年しか学校に行っていない。今まで結婚を遅らせてきたのは、ひたすら教養がある人を探していたからだ。あなたのところの三男は中等専門学校を出たろう？今は小学校の先生をしているということなら、話がまとまるかもしれないよ。」

「とてもいい話のようだね、それじゃ面倒をかけるけど、ちょっと紹介してほしいよ」と祖母は手に持っていた鶏のエサのどんぶりを下に置き、中庭のむこうから口を挟んだ。

三日後、一組の田舎の男女が八一公園の入り口で対面した。男の田舎者は洗濯で茶色に色褪せた人民服の上着に、同様に色が落ちた緑色軍隊ズボンを着き、人民解放軍のような緑色の靴を履いていた。男は枯れた葦のように痩せていて、マッチで火をつけたら燃え尽きるのに二分もかからないぐらいの様子だった。彼は丈夫な28インチの自転車を押していた。その自転車に黄色の泥がつき、梶棒とハンドルに赤いビニールをぐるぐると巻き付け、前輪後輪の車輪中心の回転部分に自分で作ったさまざまな色のビニール飾りをつけていた。ふわふわしているがちっとも可愛らしくはなかった。女の田舎者は小柄なので、船もバスも永遠に子供扱いでただ乗りができる⁴。一人は背が高く、一人は背が低い、二人はアスファルトの道を進んだ。父は自転車を推し、数歩歩いて積極的にかけた。「金塔街に住んでいるんですか？」

母が「はい、あなたは城南生産大隊に住んでいるのですか？すごく離れているようですね」と言った。

父は思った。遠く離れていないから、お前に会いにきたんじゃないか。背が低くて、小学校も卒業してないのに裸足の医者になれるなんて、何人の人を死なせたか分かったもんじゃない。父は言った。「そうです、将来あなたは金順生産隊で働き続けるのですか？」

「将来ってなんのこと？」母は少し事情が分からなかった。

「結婚後のことですよ」

「ああ、あなたの言う通りにします。戸籍はあなたの方の城南に移してもいいですわ。」父は城南生産隊に移るなんて、バカだなと思った。

父は「我が国では子供の戸籍は母親の戸籍に入るので、あなたは金順生産隊に残ったほうがいいですよ。農村戸籍だけど、畢竟、郊外で場所もいいし、食料配給券も支給される」と言った。

「畢竟」母はその言葉を繰り返した。「どんな意味？」

父はぼかんとし、ためらって言った。「畢竟、それは、よかれあしかれと言うことです。」

「そう、よかれあしかれ郊外にある。悪くはないと言う意味？」

「まあそんなところですよ。」

母は少し恥ずかしかった。「私は教養がないから、この言葉を初めて耳にしたわ。あなたは学校の先生だそうですね？」

「そうですよ」と父が答えた。「裸足の先生ですよ。」

母が言った。「本当にすごいわ。私は勉強がとても苦手で私塾に一年半通っ

たの。そこの先生に手のひらを青くなるまで叩かれ痛かった。先生というものが怖い。」父への眼差しは崇敬の念に満ちていた。

二人は八一公園を一回りした。母は傍らの柵で囲った色とりどりの花が咲く公園の中を度々眺めた。しかし男の田舎者はそれを無視した。なぜなら公園に入るためには二分の入園券を買う必要があり、二人なら四分で、ぜいたくすぎだと思った。しばらくして、二人は又公園の外を一回りして東門に来た。すでにお昼近くで、そばの国営レストランの入り口には長い列ができていた。列の一番前の人が両手でお金と食料配給券を高く挙げて叫んだ。「肉入りのうどん、肉入りのうどん一杯、なあ、肉がこれだけなのか？もっと沢山入れてくれ。」店員が「どのくらい肉を入れるかは国の規定があるのだ。あんたが食べたいだけ肉があるわけがない」と答えた。その人物が言った。「国家、国家は多くのことを管理するが、肉を何切れ入れるまで管理しているのかい？あんたはあれこれくだらない事を言わないでくれよ。」「おれがくだらないことを言っているって？おまえこそ余計な話ばかりじゃないか。いったい食べるのか？食べないなら、どいて脇によれ、人の前に立ちはだかって邪魔をするな。下がれ。」店員は後ろの方の列を指さして言った。

母は足を止め人の群れを眺め、つばを飲み込んだ。父は何かを察知し、あわてて言った。「私の自転車は二番目の兄に借りたもので、兄は午後仕事に行かなければならない。時間どおりに返さなくてはならないから先に失礼します。」そう言いながら素早く自転車に飛び乗り、前方の小道に消え失せた。瞬く間に急に姿を消してしまい、まるで何かにびっくりしたゴキブリのようだった。

母はあつけにとられて立ちつくしたまま小声で言った。「どうもケチな人のようね、でも背はとても高いし教養もある」。最後に「畢竟」と一言呟いた。

第2章 結婚

父は自転車を押しながら中庭を通り過ぎ、自転車を止めた。みんなから問われるような視線を受けて言った。「すごく背が低かったよ、まったくもって地を這う低灌木のようだ。」

上の伯母が言った。「また気に入らなかったの？おまえは選り好みしすぎだよ。」

父が言った。「だれが気に入らないと言ったんだ。」

数日後、父は母を城南の家連れてきた。古い屋敷で、青レンガと瓦葺の家だった。表門のアーチ部分は赤い色の細長い石で築かれ、ゆうに三、四メートルの高さがあり、木製の扉も高く巨大だった。門の前にはさらに紅い石の大きな台座が二つ置いてあり、当時、どのように使われたか分からないが、多分その上には昔は石の獅子が鎮座していたのだろう。しかし今はなんの痕跡もなかった。

母は門の前に立ち、父に言った。「なんて大きな家なの！あなたの家の階級は？」

父が言った。「中農だ。実際は貧農とみなされるべきだがね。おれは子供の

ころ貧乏でパンツさえ穿いていなかったんだから中農だなんて言えない。」

祖母は最初、満面に笑みを浮かべていたが、これを聞くと少し不機嫌になった。「パンツをはかない頃、おまえはまだ尻割れズボン⁵を穿いていただろう。この辺の家はどこの子供も尻割れズボンを穿いていた。パンツを穿いていた子なんて一人もいないだろ？」

父はばつが悪そうに笑って黙った。母は顔を上げて「この門はとても大きくて、見ていると頭がくらくらするわ」と言った。

つづいて、二人は父があてがわれた部屋を見に行った。その部屋は家屋全体の中で一番狭く、場所も一番奥の間だった。床は板敷だったが、長い年月を経て、色調は暗く、床板はすり減り、がらんとしてぼろぼろだった。塗料を塗った跡も見られず、元からこうだったのか、歳月の流れに磨かれて滑らかになっているのか分からない。しばしばネズミの穴を見つけることができ、穴は真っ暗で懐中電灯を照らしても底まで見るができない。床の上を歩くと空洞で音が響き、幽霊が床下で駆けずり回っているかのようなようだった。

母はあちこちを眺め「とても暗いわ」と言った。そして屋根裏を見上げた。「この屋根裏は少し恐ろしいわ、悪霊が上で餅（びん）⁶を食べているみたい。」

父が言った。「君の肝っ玉は小さいのかい？毛主席は我々に果敢に悪霊と戦い、横暴な権力者に屈服するなど教え導いた。それにこの世の中に幽霊なんていやしない。」

母はきまり悪そうに笑った。

父は続けて説明した。「一番上の兄の部屋は屋根裏がなくて、面積も少し広い。家具も幾分精緻で、椅子の背には色ガラスがちりばめられている。それにいくつかの磁器の花瓶がある。」

「精緻？」

「手がこんでいるということだ。」

母は笑った。「教養がある人は話すことも違うわ。この家はもともと誰の家のものだったの？」

父は言った。「もちろん地主のものだ。貧農の私の家が建てられるものか？共産党の土地改革の時、民兵が地主を中庭に引っぱって行って銃殺した。子供が二人いたが、彼らは自分たちで空き地を見つけ茅葺の小屋を建てて住んだ。地主の家はわが家に分配された。しかし全部は我家のものにならなかった。例えば、あの母屋の両脇の部屋は別の人に与えられ、去年二番目の兄がやっと買い取ったんだ」

母が「まあ、悪徳地主の家だったのね。労働人民から搾り取った血と汗で建てたのだもの。道理でこんなに立派なのは当たり前だわ」と言った。

彼らは間もなく結婚した。新居はこの陰気な部屋だった。ベッドには真新しい枕がおかれ、枕カバーには何本かのヒマワリ、黄金のまばゆい花びら、深緑のヒマワリの葉、燦然と光を放つ真っ赤な太陽が刺繍され、社会主義のすばらしい未来を象徴していた。傍らには大胆奔放な赤い字が刺繍されていた《大海の航行は舵取りが頼りである》⁷。あでやかな色彩に満ち華やかであったが、部屋のどんよりとした陰気さを消すことはできなかった。真っ暗な屋根裏、ネ

ズミの穴だらけの床、埃まみれの洋服箆笥、ペンキがまだらに剥げた椅子たちが、歳月を隔てて、新婚の彼らを覗き見していた。毎朝母はほの暗い明け方に起き、生産大隊へ仕事に行かなければならなかった。父も続いて起きざるを得ず、欠伸をしながら伯父の自転車を推した。金順生産隊は七、八キロ以上離れていたの送って行かなければならなかった。先ず、三キロあまりの石炭燃えがらを敷いた道を越えて行かなければならなかった。道の両側は見渡すかぎり田んぼで、田んぼの中に村落が二つ三つ点在し、それはまるで青草の中の犬の大便のかたまりのようだった。バスは通っておらず、三キロ行くとようやくアスファルトの道になりバスが通っていた。停留所を五つ乗車し、交通費は1角5分で、往復3角だった。しかしこれは決してわずかな金額ではなく、おまけに往復ガタガタ揺れるのは大変だった。もちろん石炭の燃えがらを敷いた道を送って行くしかなかったが、父は一・二時限の授業があるときは母を送って行く時間がなかった。そのため、父と母は最終的にこの問題を解決するために相談をした。「金塔街に部屋を借りることができるかな？」と父が言った。

母が言った。「羅細賤の家の一間あるわ。」

「いくらだ？」

「聞いていないけど、多分一カ月5元くらいでしょう。」

「それならちょっと聞いてみてくれ、5元なら借りるのを考えてもいいが、もっと安ければさらに良い。」

その後、母は行ったり来たりをしなくなった。羅細賤の家は母の実家から歩いてわずか300メートルで、母は毎日田畑へ慌てて急いで行かなくてもよくなった。実家で食事をしたが、もともと分家はしてはいなかった。父は城南で家の留守番をし、しばしば母の町へ出かけ母と一緒に過ごした。

その家は非常に狭かった。うす暗い電灯の下、母は私にご飯を食べさせていた。母はおずおずと私に言った。「お母さんはお腹が痛いから、おまえ自分で食べられるだろう？」

私はぐずって言った。「ダメ、食べさせて」

「お母さんは本当にお腹が痛いんだよ」と母はお椀を置き、お腹をさすってうめいた。

私は声を上げて泣いた。「ダメ、食べさせて」

母はわたしをひっぱり、自分の膝の上で押さえ、やみくもに私の尻を手でひっぱたいたが効き目はなかった。私の泣き声はどんどん大きくなり、母は私を再度膝の上に置きなおし、お椀を手にし、一匙ご飯をすくって私の口に押し込んだ。羅細賤のおばさんが騒ぎを聞きつけてやってきた。「坊や、なんで泣いているの？」

母が言った。「おばさん、私お腹が痛いの、もしかしたら子供が生まれるかもしれない。家の親を呼んでくれないかしら」

おばあさんは「いいよ、おまえさん、こんな寒い日に子供を生むなんて、かわいそうだ」と答え、纏足の足を踏み出し、メンドリのようによたよたと私の祖母の家へ向かって駆けて行った。ちょうど陰暦の正月で、春の寒さが厳しい夜、私の祖父は大八車を引き、生きている豚を運ぶように母を南昌第二病院へ運んだ。その日の深夜、また一人のあわれなやつ、私の妹が生まれた。

二人の子供を育てながらこのように部屋を借りて暮らしていくのはしよせん長続きするやり方ではなかった。もともと貧乏な上、家賃を払わなければならなかったからだ。色々相談をして、父は田舎の親戚を引き連れ蟻の引っ越しのように一輪車と二輪車を使い、城南の田舎からレンガを運び、母の実家の外壁に小屋を付け足して建てた。

小屋は20平米もない広さで、シャベルで平らにならして二部屋を作った。北側の部屋は行李やこまごました物を置き、花崗岩の上には母がやっている裸足の医者薬箱を置いた。南側の部屋は寝室で、大通りからわずか10数メートルしか離れていないが、幸い当時は交通量が少なく、夜になるとほとんど車を見かけることがなかったのでやかましい音は聞こえなかった。小屋の地盤は極めて低く、湿っぽかったので、雨が降るとすぐ水浸しになった。ある時私は、母が木の桶を抱え、腰を曲げて雨水をすくって力いっぱい外へ撒いているのを見た。両足のズボンの裾をまくりあげ、両足のふくらはぎがはち切れそうだった。多分ふくらはぎが短いので、筋肉がみな集まり固まってしまったのだ。

「いまましい天気だ、朝から晩まで雨ばかり降る。ほんとうにいまましい」と母は恨みごとを言った。

私は言った。「お母さんのふくらはぎはどうしてそんなに太いの。僕は今まではかにこんな太いふくらはぎは見たことがないよ。」

母はきまり悪そうに笑った。「背が低いからだよ、お母さんはもともとこんなに背が低く生まれるはずじゃなかった。おまえのひいおじいさん、おじいさん、おばさんを見てごらん。背が低い人は誰もいないのに私だけ背が低い。私は長女で早産で生まれた。母さんの話によれば、私を産んだ時、ちょうど避難していて、日本人の飛行機が空から爆撃してきたの。それに食べる物もなくて、本当にあわれだったのよ。でなければこんなに背が低くなるはずはなかった。」

閻 小妹(信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 特任教授)
上條 和恵(信州大学 人文学部 社会人受講生)

- 1 かつての人民公社などで労働量とその報酬を計算する単位。
- 2 最低限の医療的訓練しか受けず、農業をやりながら医療衛生業務に携わる存在。
- 3 中国人民解放軍における模範兵士とされる人物、無私の象徴。
- 4 中国では乗車料金は身長が基準となることが多い。
- 5 幼児が排泄しやすいよう股の開いたズボン。
- 6 小麦粉をこねて、円盤状に薄く伸ばして焼いた食べ物。
- 7 毛沢東思想を讃えた革命歌のタイトル。中国語原文は《大海航行靠舵手》。

2021年3月1日受理 2021年3月3日採録決定